

応答的保育に関する研究

——保育者の言語的応答性の変容——

竹内 里絵

(福岡教育大学大学院)

これまでの言語的応答性の研究では、子どもの家庭における母親との言語的相互交渉、二園における保育者の言語的応答性の違い、異年齢の子どもの言語行動に対する保育者の言語的応答性などについての研究はおこなわれているが、一人の同一の保育者がどのような言語的応答性の変容をたどるかについては研究がおこなわれていない。本研究は、同一の幼児の家庭と幼稚園における言語行動をひとつの指標として、保育者の言語的応答性の変容を検討する。

方法

被験者：K幼稚園保育者1名。第1期観察は、A、Bの2名、第2期観察は、C～Eの3名、第3期観察は、F、Gの2名の4歳女兒、計7名を対象とした。

手続き：幼稚園における保育者と子どもの間の言語行動と家庭における母親と子どもの間の言語行動をそれぞれ30分間、テープレコーダーで記録した。同時に子どもと保育者、子どもと母親の行動・視線を含む相互作用に留意し、筆記記録した。保育者には、第3期観察をおこなう前に、第1期観察・第2期観察の言語的応答性の観察記録を見せ、その特徴を説明した。

被験者の観察時期：第1期観察 1993年1月（A：1/14、B：1/19） 第2期観察 1993年6月（C：6/18、D：6/30、E：6/16） 第3期観察 1993年9月（F：9/9、G：9/17）

結果と考察

Table1は、第1期観察・第2期観察・第3期観察における子どもの一発話の文節平均を示したものである。第1期観察と第2期観察におけるCを除く4人は、幼稚園よりも家庭の方がその数値が高く、幼稚園より家庭において一発話における文節数が多いことがわかる。しかし、第3期観察においては、家庭より幼稚園の方が数値が高く、家庭より幼稚園において一発話における文節数が多くなってきており、幼稚園において、子どもは、第1期観察、第2期観察時よりも第3期観察時の方が多くの語彙を用いて発話をしていることを示している。Table2は、保育者とそれぞれの子どもの会話の長さを比較するために、2turn以上を1つの会話として捉え、6-12turnを中心に、2-5turnを短い会話、

13turn以上を長い会話として分類し、その回数を示したものである。第1期観察においては、全体的に会話数が少なく、会話も短い。第2期観察において、会話数は第1期に比べて増えてはいるが、短い会話を中心である。しかし、第3期観察におけるF、Gについては、会話数が増え、また長い会話も多くなってきている。以上のことから、幼稚園における幼児の言語行動が、第1期観察、第2期観察よりも第3期観察時の方がより活発になってきているということから、第1期観察、第2期観察時よりも第3期観察時の方が、保育者の言語的応答性が、向上しているのではないかとということが考えられる。

そこで、それぞれの子どもに対する保育者の言語的応答性を発問、過程、受容の構成成分にしたがって分析し、その頻度をTable3に示した。発問、過程、受容の頻度を比較してみると、第1期観察において、Bは、発問、過程に比べて、受容の数値がわずかに高いが、Aは、過程、受容に比べて発問の数値が高くなっている。第2期観察において、D、Eでは、発問、過程に比べてかなり受容の数値が低く、Cにおいては、過程、受容に比べて発問の数値が高くなっている。つまり、第1期観察、第2期観察において、保育者は、受容することよりも多く発問する傾向にあることを示している。一方、第3期観察においては、F、Gとも、発問、過程に比べ、受容の数値が高く、第3期観察においては、受容による対応が多くなってきていることがわかる。これらのことから、保育者の言語的応答性が、第1期観察、第2期観察では受容的なものではなかったが、第3期観察では受容的なものに変容してきたといえよう。

Table 2 幼稚園における会話の長さの比較

	Short (2-5turn)	Medium (6-12turn)	Long (13+turn)	合 計
A	1	1		2
B	3	3		6
C	5	2		7
D	17	6		23
E	13	7		20
F	25	8		33
G	19	7	2	28

Table 1 子どもの対話中の発話文数・文節数の比較

	第 1 期 観 察				第 2 期 観 察						第 3 期 観 察			
	A		B		C		D		E		F		G	
	H	K	H	K	H	K	H	K	H	K	H	K	H	K
発 話 文 数	27	9	34	26	33	24	113	56	317	71	120	104	117	97
文 節 数	68	18	103	53	54	44	291	111	824	143	274	253	190	251
1 発 話 の 文 節 平 均	2.52	2.00	3.03	2.04	1.64	1.83	2.58	1.98	2.60	2.01	2.28	2.43	1.62	2.59

H:家庭 K:幼稚園

Table 3 保育者の言語的応答性の種類

		第1期観察		第2期観察			第3期観察	
		A	B	C	D	E	F	G
発問	Yes-no質問		3	8	10	9	2	12
	WH質問	6	6	13	21	20	11	29
	計	6	9	21	31	29	13	41
過程	明瞭化				1	4	2	2
	補足	1			1	3	1	
	解釈				3	5	6	9
	展開			2	6	6	5	3
	リード							
	発問の転換				1	3	5	1
	示唆			1	6	4	5	2
	説明		5	1	4	4	7	6
	提案	1		1	5	4		
	命令		4	1	4	1	1	
計		2	9	6	31	34	32	23
受容	くり返し		4	4	3	2	9	17
	承認	1	7	1	3	5	2	2
	賞賛	1		1	5	3		4
	否定							1
	非承認							2
	無視			2				
	制止							
内容	感情移入	1	3		2	8	12	11
	同意				5		8	1
	確認				5	2	9	5
	計	3	14	8	23	20	40	43

さらに、Table4・Table5では、保育者の応答性の中で、特に変化した項目としてあげられる解釈、感情移入について具体的プロセスで分析したものを示した。子どもが曖昧な答えをしている場面(Table4)では、第2期観察のEの曖昧な答えに対して保育者は、子どもに答えを言わせるように発問を何度も変え、その答えがでたところで、まずくり返しで受容し、話が進展することを期待して感情移入している対応である。しかし、子どもは、うなづくだけでことばによる応答はせず、そこで会話はとぎれてしまっている。一方、第3期観察では、子どもの曖昧な答えに対して、子どもの言いたいことをまず解釈で応答し、次に子どもの発話をくり返しで受容し、さらに会話が続くような感情移入で応答している。保育者のWH質問ではじまる場面(Table5)においては、第2期観察では、保育者がしたWH質問に対して子どもが答えたことを受容せずに、続けてWH質問している。次に、子どもの興味を喚起させようとして示唆しているが、保育者は保育者がおらったことに目を向けさせようとして命令し、子どもは返事をしただけでその会話はとぎれてしまっている。それに対して、第3期観察では、保育者のWH質問に子どもが答えたことから子どもの言いたいことを解釈して応答し、さらに子どもがもっと発話したくなるような賞賛で応答している。両事例とも、第2期観察は、

保育者の意図が全面に出ており、教育的ねらいを達成しようとする応答であるが、第3期観察においては、意図を全面に出さないで、子どもが言ったことを上手に解釈し、さらに子どもが言ったことに感動をもって応答する感情移入で、会話をふくらませようとする保育に変わってきている。

Table 4 子どもの発話があいまいな場面における保育者の応答性の比較

保育者の発話	E子の発話	保育者の発話	G子の発話
今日の天気はいかがですか？【WH質問】	うん いかが	どんなお家なの？ 【WH質問】	木のおうち
何ですか？今日の天気は？【WH質問】	うん	木のおうち？【くり返し】	木のおうち
お空に何が見えるかな？【WH質問】	おほしさまが見える	木でできたおうち？【WH質問】	うん
お星様が見える？【くり返し】		何階建て？【WH質問】	6たい
わぁ素敵なお家だ		6階もあるの？ 【WH質問】	うん 6かい
コースターだな		6階もあるのいいな【感情移入】	うん
先生も乗りたいな【感情移入】			おとうさんがくぎで、トントントンってしたんだもんね
お星様見に行きたいな	(うなづく)		

Table 5 保育者のWH質問ではじまる会話における応答性の比較

保育者の発話	E子の発話	保育者の発話	G子の発話
さつき描いたジェットコースターどこへやった？【WH質問】	ここ	どこで木を切ってきたんだろう？	木はあったんだ 幼稚園
さつき やったのどこへやった？【WH質問】	かいたの？	おとうさん【WH質問】	うん
さつき かいたの	ジェットコースター あつち	幼稚園にあったの？	おとうさんがとってくれたんだ
つけてあげるよ	このまま	木が？【WH質問】	おとうさんがワッセワッセってとつたんだもん
セロテープで【示唆】	Eちゃんのところがいい	おとうさん	わたし わたしもね
もってきて	はい	すこいね【感情移入】	ひっぱったんだもんね
じゃあ自分でして【感情移入】			おとうさんの背中

これまでみてきたように、第1期観察から第2期観察にかけて、保育者の言語的応答性の変容はみられないが、第2期観察から第3期観察にかけては、その変容が顕著であった。実験者は、第1期観察後、被験者に対しては、何もおこなわなかったが、第2期観察後ただ単に被験者の言語的応答性のデータを見せたが、指導や示唆はしなかった。しかし、保育者に聞いてみると、データという客観的なものをみることで、今までの子どもに対する対応を自分なりに評価・反省し、その後、どのような対応をしたら、子どもがよく発話するようになるのかを常に意識するようになったということである。

このことから、保育者が、客観的なデータに基づいて自分の保育を省みることによって、保育者自身の言語的応答性を高めることができ、そのことが、子どもの言語能力を高めることになるということがいえるであろう。